特集（第一部・ケース 2）

日本で生まれた外国人・イスラム教徒・女性

—異文化の狭間で—

キーワード
チュニジア人，2 つの文化，2 つの言語，宗教

ハビーバ　スラマ

1. 日本で生まれたチュニジア人

私の両親はチュニジア人で，私は日本で産まれました。父は中国の大学を卒業後そのまま中国にいましたが，1989 年に天安門事件[1]が起き，身の危険を感じたことがきっかけで同年に来日し，就職しました。

父は，日本からチュニジアに一時帰国した際に母と出会って結婚しました。その後 2001 年に，父だけ日本へ戻り，その 3 ヶ月後に母が来日しました。私は 2002 年に新宿区の病院で生まれました。3 歳になると保育園に通い始め，その後公立の小学校，中学校，高校に通いました。

私が通った小学校と中学校では，外国にルーツを持つ児童・生徒は，1 学年に片手に収まるほどしかいませんでした。しかし，私が入学した高校には外国語コースがあり，外国にルーツを持つ生徒の数は，小学校・中学校に通っていた時の 2 倍でした。2023 年現在，私は大学 3 年生で就職活動が本格化しています。

本稿では，両親共に外国人という日本では少し珍しい存在として，私が今まで生きてきた経験について述べたいと思います。

1-1　小学生のとき

小学校低学年の頃の私は，先生や友達と日本語を話すことや，漢字を含めて書くことに問題は無かったのですが，授業を受けるにあたって日本語を聞いて学習内容を理解するには，わずかに不十分な部分がありました。そのため，個別に，学校外の指導者から，週に 2 回程度，取り出し授業を受けていました。取り出し授業は，クラスで受けた授業の内容をより分かりやすく指導者から教えてもらうというものです。おかげで 3 年生に進級する頃には取り出し授業がなくても授業の内容を理解し，テストで周りの児童と同じくらいの点数を取れるようになりました。また，友達に恵まれ，私が外国人だからという理由で仲間外れにされるというようなことはありませんでした。

しかし，問題もありました。たとえば，母にとってとても悲しいエピソードがありました。私が低学年の頃，母は，学校で配布された遠足のしおりに書いてある持ち物が読め

ず，お弁当を私に持たせず行かせてしまったのです。その時は，代わりに学校の先生がお昼ご飯を買って準備してくださいました。その頃の感情は覚えていませんが，物心のついた頃に同じことが起きていたら複雑な感情になっていたかもしれません。また，私が覚えていることでは，学校のお知らせを電話で回す連絡網に関して問題がありました。連絡網は，基本的に親が回すものですが，父は日中仕事で家にいることが少なく，母が回すことになります。しかし，母はその頃今より日本語によるコミュニケーションができなかったので，連絡を回すことが難しかったのです。よって，連絡網上私の前の人が，私の次の人にも，母の代わりに連絡を回してくれました。このことは，私の家庭にとって，とても助かりました。母の代わりに連絡してくださった人には感謝です。

1-2　中学生のとき

中学校に入ると多くの生徒が部活を始めます。私はバレーボール部に所属していました。部活は週に 5 日活動日があったのですが，チュニジアで中学時代を過ごした父には，放課後や休日に学校で生徒が何らかの活動をするというのがあまり理解できなかったそうです。そもそも，チュニジアには部活動というものが存在しません。授業や校外学習以外の活動というものが基本的に存在しないのです。したがって，私が部活動をすることは，父には新鮮だったようです。父は，私が部活動を頑張ることを応援してくれました。たまにバレーボールのパス練習に付き合ってもらうこともあったのです。応援してくれたのは母も同様でした。

高校受験では，特に両親が外国人という理由で大変に感じることはなかったです。ですが，国語に苦手意識があったので，自習以外にプラスアルファでの対策が必要だと感じ，数学と理科に加えて国語も塾で対策をしていました。

1-3　高校生のとき

高校に入学して 2 年ほど経つと，大学受験のことを考える時期に入ります。私は受験を意識し始めた頃から，2023 年現在通っている大学の国際経済学科に AO 入試（総合型選抜）で入ることを第一志望としていました。志望の理由は，成績や英検を含めた入試の応募資格と自分の条件が合っていたとことと，自分自身が海外にルーツを持っているので何か国際的な分野を学びたいという思いがあったことです。

この AO 入試では，第一選考として 1500 字の小論文を作成し提出するというものがありました。小論文のテーマは，「移民の増大が日本社会にもたらすメリット・デメリット」という内容でした。このテーマは，両親が移民である私にはうってつけでした。なぜなら，私の両親，そしてその知り合いの外国人の境遇など，かれらの実体験を用いながら書くことができたからです。実際に，両親やその知り合いの実体験を用いながら小論文を書くことは，比較的簡単でした。学校の先生や，母のように「日本に住む様々な国の方と日本人がお互い違う文化を持ちながら共生していく」という，多文化共生コミュニティのメンバーの方に添削などをしてもらい，周りに助けられながら小論文を完成することができました。

そして，第一次選考に合格し，第二次選考の面接を経て，晴れて合格することができました。面接では，面接官と英語で会話する時間が設けられたのですが，もともと英語が好きで得意な方であったので，難なく会話をすることが出来ました。母親やその周りの同じ境遇にある人の体験談を含めて小論文を書き進められたのは，かなり強みになったと思います。また，当時協力してくださった人たちには，今でもとても感謝しています。

1-4　大学生の今

2023 年現在，私は大学 3 年生になり，就職活動が本格化しようとしています。私は，外国人として，社会から英語の活用を期待されることが，これから先少なからずあると考えています。自分としても，大学在学中の目標が英語を習得することなので，英語の話せるグローバルな人材と交流する機会がある企業のインターンシップに応募をしているところです。TOEIC の高得点獲得に向けて学習も進めています。

就職活動に関しては，大学受験の時のように，志望動機を書いたり面接で話したりするときなど，自分が持っている外国のルーツを活用できる場面があればいいな，と思っています。

就職活動だけではなく，私の大学生活は充実しています。現在は友達と共に，高校 2 年生の頃に始めたコンビニでのアルバイトをしています。業務内容は接客，レジ業務，商品の品出し，清掃，代行サービスの受付など多岐に渡ります。最初は覚えるのに苦戦しましたが，現在ではすっかり慣れて，気を楽にしてアルバイトができています。

1-5　これまでの私を振り返って

これまでを振り返ると，私は，外国人として，周りの人たちおよび日本社会にかなり馴染めているように感じます。私は，チュニジアに行くことを「帰国」ではなく，「旅行」であると感じています。国籍の上ではチュニジア人ですが，日本を母国だと感じているので，日本社会に馴染んでいると思います。また，外見は日本人ではなくても，生まれも育ちも日本なので，価値観としては日本の考え方が自分の中で多くを占めています。たとえば，誰かと待ち合わせをするとき，チュニジアでは約束の時間に遅れることは日常のことらしいのですが，日本では約束の時間を守ることが常識です。私は集合時間に遅れることは良くないと思うので，日本人とほぼ同じ価値観を持っていると思っています。

また，外国人として生活する上で得をすることもありました。印象的なのか，顔や名前を覚えてもらいやすかったり，興味を持ってもらいやすかったりします。これは，どのコミュニティにいても得だと感じることです。

さらに，外国の文化と日本の文化の両方を持っているため，グローバルな視点で物事を見られることも利点です。つまり，日本にいながら外国人の両親に育てられたことにより，一般的な日本人の文化や価値観に加え，それとは異なる文化や価値観などが備わり，より広い視点を持てていると感じています。実際に同世代の人たちと接していると，自分はかなり海外に対しての知識がある方だと感じられます。また，外国にルーツを持っている人と話すときには，相手の国について知っていることがあり，会話も弾みやすいです。

特に，日本でチュニジアにルーツを持つ人はとても珍しいので，出会えるととても嬉しい気持ちになります。

言語について振り返ってみると，英語について少し特別なことが言えると思います。それは，外国にルーツをもっている私は，英語を話せることを周りから期待されやすいということです。英語で書かれた文章で分からないところがあると，私に意味を質問してくる友達は多いです。また，アルバイトの面接においては，面接者が単純に気になっただけだとは思いますが，私が英語を話せるのかどうか，聞かれることもありました。英語について質問する友達や，英語能力を確認するアルバイトの面接の方に関しては，私は当然のことだと感じています。日本では，「外国人」や「グローバル人材」というと，すぐ英語が話せる人，というイメージを持つ人が多いからです。しかし，チュニジアの公用語はアラビア語とフランス語で，英語を使う国ではないのです。私は英語を使う環境にいないので，本来ならば英語が話せることを期待されるはずはないのです。しかし，周りの期待に応えたいという思いが，私の中にはあり，その思いが英語を学ぶ原動力になっています。

2. イスラム教徒として

1-5 で，外国人として生きていて得をすることがあると述べましたが，そればかりではありません。イスラム教徒として，少し苦労することがありました。

2-1　ラマダン

イスラム教徒には，年に１回ラマダンという行事があります。これは１ヶ月間，日が昇ってから沈むまでの間，一切飲食をせず断食をするというものです。私は小学校高学年の頃からラマダンを行っています。小中学生の頃，ラマダンの時期になると，給食の時間に保健室に行かせてもらっていたことがありました。クラスメイトから「何故，いなくなったのだろう？」と疑問に思われたり，「食べなくても大丈夫なの？」と聞かれたりすることがあり，その頃の自分にはちょっとしたストレスでした。

今は，ラマダンの時期になると，友達に宗教上の理由で断食をしていることを伝えますが，中学生ぐらいまではクラスメイトにどう思われるかを気にして，それを伝えることになかなか踏み込めませんでした。成長していくうちに，自分がイスラム教徒であることを友達にオープンにすることにより，いかに自分が生きやすくなるかを知ることになりました。実際に，イスラム教を信仰していることを伝えて，私に対して嫌な反応をしてくる人はほぼいません。そして，私自身イスラム教を信仰することに後ろめたい気持ちもありません。私は，イスラム教徒として生きることに誇りをもっています。

2-2　少ないイスラム教徒

私はイスラム教徒ですが，ほとんどの友達はそうではありません。よって，地元，学校，アルバイトなどのほとんどのコミュニティでは，私のみがイスラム教徒である状況に近くなります。そのことから，たまにですが，孤立感を覚えることがあります。自分だけに禁止されていることがある，自分だけがラマダンをしなくてはならない，そのような孤

立感です。友達は，宗教的な禁忌の対象となっている豚肉やお酒などについて配慮してくれるので助かります。しかし，私は，日本では，信者が少ない宗教に対してネガティブなイメージを持っている人が多い印象を持っていて，なんとなくイスラム教徒が理解されていないように感じています。とは言っても，私の周りの人は食事に行くときなどにいつも配慮してくれるのでとても感謝しています。ラマダンの時期に，たまたま一時的に関わる人と学校で昼食をとるときには，「最近は昼食を控えている」とだけ伝えることがあります。しかし，配慮をしてもらうためにも，信仰している宗教について相手に話すことは私にとって大事なことだと思います。

2-3　女性であること

イスラム教は「男女は平等であるが違うもの」という価値観から，男女の違いを考慮した教えを持っています。たとえば，女性には生理があり，出産する可能性がありますが，男性にはそれらはありません。また，身長や体重などにも差があります。イスラム教の教えに男女間に規定の違いがあるのは，生物的に差があるからです。イスラム教は女性が抑圧されていて男女が平等でない，というイメージを持っている人が多いかもしれません。しかし，男性にとって義務であることが女性には免除されていることとして，常見（2019）でも例があげられています。その例とは，男性には家族の生活費を稼ぐ義務があるが女性にはそれがない，女性は月経中のラマダン月中の断食と礼拝の義務が免除されるということです。つまり，なにもかも男女が同じように規定されることは，逆に不平等になるということです。

最近，日本では男女平等，男女対等ということが強調されていますが，生物的に違いのある男女に，同じ機会を同じ条件で与えることが本当の意味での平等なのか，私には疑問に思うところがあります。

また，結婚に関してイスラム教徒の女性は，イスラム教徒またはイスラム教に改宗した男性との結婚のみが認められます。したがって，日本で結婚相手を見つけるのはイスラム圏の国にいるよりも難しいと思います。私は，将来的に良い結婚相手が見つけられたらといいな，と思っています。

2-4　母の工夫

母は，私が日本でイスラム教の教えを守りながら生活するために，大変だと感じたこともあったようです。母は，私にイスラム教徒としての在り方を教えるために，私の前でコーラン[2]を読んだり祈ったりするなど，イスラム教徒の見本となるように意識してきたと言います。コーランを読むことや祈ることは日本では馴染みの無い習慣ですが，それらを行うことに対して私が抵抗を感じたことは一度もなく，進んで行っています。

一方で母は，私が日本で生活する中でイスラム教を信仰することに対し苦痛を感じてほしくないという思いから，私が露出度の高い服装を着るなど，教えから遠ざかったことをしてしまっても，時には許容することも必要であると考えているそうです。私は，母がこ

のようなおおらかな考えを持ってくれたからこそ，幼い頃から日本で生活している近所の子どもたちや同級生たちと馴染むことができたのかもしれません。

3. 日本語母語話者として

3-1 両親との会話

私の両親はチュニジア人ですが，私の母語は日本語です。家で両親とどのように会話するかというと，父とは互いに日本語で会話します。母と会話するときは，母はアラビア語で話し，私は日本語で話します。父は日本に長くいて日本語が流暢なので，仕事場とは違い日本語を使うことが絶対とされない家の中でも，私と日本語で会話をするのだと思います。また，日本で生活している周りの子どもたちと馴染んでほしいという思いから，日本語で生活することを望んでいるそうです。

私と母が違う言語で話すことについて，不思議に思う人は多いと思います。アラビア語と日本語を混交させてコミュニケーションをとることには基本的には問題はないのですが，私はアラビア語に不十分なところがあり，母にも日本語が不十分なところがあるので，互いに理解できないことが，わずかにですがあります。よって，私が話す内容が母にとって理解が難しそうであれば，私が発する一文を短くするなど簡単な日本語に変換しながらその内容を伝えます。こうすれば母は私の日本語をきちんと理解してくれます。逆に私が母のアラビア語を理解できない場合は，父に助けを求めます。父は，日本語で母が話すアラビア語の意味を教えてくれるので，母の話す言葉を私は理解できます。母は，このように言語が壁となって理解ができないときに，私にアラビア語を上達させてほしいと言うことがあります。そして私も，上達するべきだと感じています。

3-2 日本語

私はチュニジア人なので，自分の母語がアラビア語であってもおかしくないのですが，前述したように，日本語が母語です。日本語が一番楽に話せます。家では両親がアラビア語で話しているのを聞いたり母にアラビア語で話しかけられたりしますが，それ以外の場面では日本語しか使いません。幼少期から現在にかけて所属してきた保育園，学校，塾，アルバイト先などのコミュニティ全てが，日本語を使う場所です。日本語を話す機会の方がアラビア語に比べて確実に多いので，日本語が私の母語となったのだと思います。私の日本語能力は，周りの日本人の友達と同じレベルで，私は日本語ネイティブです。

3-3 アラビア語

これまで，5 回チュニジアに行きました。チュニジアでは祖母の家で過ごします。叔母やいとこに祖母の家の近くにある海へ連れていってもらったり，親戚で集って楽しく食事をとったりすることが多いです。チュニジアでは，アラビア語でのコミュニケーションが求められます。親族とコミュニケーションをとる際に使う言語はアラビア語のみだからです。アラビア語が不十分であったとしても，アラビア語で会話をします。

日本で生活する上では，日本語を話せれば言語的に問題はないですが，私はアラビア語を上達させたいと考えています。チュニジアにいる家族や親戚とコミュニケーションをとっていきたいからです。一人でチュニジアに行くのに不安がないくらいにアラビア語を上達させ，遠くにいる家族とより深いコミュニケーションをとりたいと思っています。

3-4 日本語母語話者としての母へのサポート

母は日本語に不十分なところがあるので，その点で私が母にサポートをすることは，日常においてよくあります。たとえば，母宛てに投函された手紙や書類を母の代わりに読み，簡単な日本語にして母に伝えたり，母の代わりに日本語で書いて手続きをしたりします。

母が困っているときにサポートをすると，今まで母が私を育てるためにいろいろなことをしてくれたことに対して恩返しができている気がして嬉しくなります。このような日本語の代読や代筆などのサポートが，今の私にできる，母への恩返しだと思っています。

4. 将来の夢

私には密かな夢があります。イスラム教徒が安心して食べられる「ハラールフード」を日本のコンビニや飲食チェーン店，スーパーなど身近な場所で食べたり購入したりできるようにするビジネスを開発するという夢です。

日本では，イスラム教徒ではない人は気づきにくいですが，豚肉を使った食品が非常に多く存在しています。たとえば，コンビニで販売しているお弁当です。表側の商品の名称だけを見ると，豚肉が含まれてはいないように見えても，裏側の成分表を見ると豚肉の表記があることが多いのです。また，ほとんどのパン，お菓子，スイーツにはショートニングやマーガリン，ゼラチンが使用されています。これらの原材料は動物性で豚肉を含むものが多いので，私達イスラム教徒は口にすることを避けなければなりません。

イスラム教徒である私は，飲食店で食事をするときも，事前に公式サイトからアレルゲン情報をチェックしたうえでメニューを選ぶことが多いです。日本で生活していると，この手間を省けたら楽なのに，と思うことがよくあります。このような実体験から，私は，「ハラールフード」をより身近な場所で食べられたり，手に入れられたりできるようにしたいと考えるようになりました。よく一緒に食事に行く友達は，私と長くつき合いがあるため，ある程度イスラム教に関して知識があり，一緒にメニューの内容をチェックしたり店員さんに聞いたりする配慮をしてくれます。しかし，食事を共にする人全てがその配慮をしてくれるとは限りません。日本で「ハラールフード」の認知が広がれば，日本人もイスラム教徒も，お互い一緒に食事に行きやすくなるのではないかと思います。さらに，お互いが同じ社会で共存しやすくなります。

これを実現させるためには，いろいろなコンビニや飲食店に「ハラールフード」の売り込みや導入を提案する必要があると考えています。しかし，今の時点の私は，この夢を実

現させるための明確な情報や手段を持っていないので，インターネットや私生活，就職活動を通して得ることができればと考えています。

5. おわりに

「私は，言語の壁，文化の違い，宗教などの障害を忍耐強く乗り越えた」

これは，異国の地である日本で私を育ててくれた母の言葉です。母は，困難を乗り越えて娘を 2 つの文化に適応させることができたことを嬉しく思う，と言っていました。また，仮に母が私をチュニジアで育てていたら，言語，文化，宗教の面での苦労はなかったけれど，チュニジアでは雇用の機会が不足しているため，雇用の機会が豊富にある日本で私を育てたことはメリットだと言っています。

母の言うように，現在チュニジアは失業率が高く，就職先が少ない状態です。チュニジアで私が育っていたら，自然にイスラム教徒としての生活を送ることができたでしょうが，就職など将来的なことを考えると，日本で育つ方がより高い水準で生活をすることが可能です。私は，日本で育ったことにとても満足しています。

母は，とても繊細ですが，同時に忍耐強いです。周りに同じ境遇の人がほとんどいない中で，母なりの考えで頑張って私を育ててくれました。私がイスラムの文化を持ちながら日本で生活するうえで，生きづらくならないように考えながら育ててくれた母には，とても感謝しています。母のおかげで，私は，イスラム教の教えを守りながら日本での生活を楽しみ，2 つの文化にバランスよく適合することができていると思います。

私が将来，日本で母親として生活するとき，同じように子育てで大変に感じることがあるかもしれません。そのときには，母がどのように私を育ててくれたかを思い出して，頑張りたいと思います。

【注】

(1) 中華人民共和国・北京市にある 天安門広場に民主化を求めて集結していたデモ隊に対し，軍隊が武力行使し，多数の死傷者を出した事件。

(2) イスラム教の聖典。ムハンマドが唯一神アッラーから受けた啓示を集録したもの。

【引用文献】

(1) 常見藤代（2019）FUJIYO Photography （常見藤代氏ホームページ）「イスラムの女性は差別されている？イスラムの「男女平等」」
https://www.f-tsunemi.com/blog/realislam/24766/ (2023 年 8 月 26 日閲覧)

（専修大学　学部生）